

よしつねせんぼんざくら

義経千本桜

〔解説〕

竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。延享四年（一七四七）大坂竹本座初演。全五段の時代物。この作品は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。義経伝説の堀川夜討ち、大物浦、吉野落ちの三事件を骨子とし、そこに壇ノ浦での平家滅亡に際して死んだとされた知盛（とももり）、維盛（これもり）、教経（のりつね）が、実は生きていて源氏に復讐しようとする筋がからまっています。

〔あらすじ〕

四段目―吉野の河連法眼（かわつらほうげん）の館に匿われている義経のもとへ国元に帰っていた佐藤忠信が尋ねて来ますが、そこへ静御前の供をしたもう一人の佐藤忠信が現れます。不審に思った義経が静御前に詮議させると、実は初音の鼓の皮に張られた狐の子が、親を慕って忠信に姿を変えていたことが判ります。義経から鼓を与えられた子狐は、攻めてくる教盛を狐の力で散々悩ませて義経の恩に報いるのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

河連法眼館の段

鶯の声なかりせば雪消えぬ、山里いかで春を知ら

まし。春は来ながら春ならぬ、九郎判官義経を御慰

めの琴三昧や、河連法眼が奥座敷、音じめも世上忍

び駒、柱に立つる雁金も、春を見捨てぬ志、げに頼も

しきもてなしなり。かかる所へ取次の侍まかり出で

「佐藤四郎兵衛忠信殿、君の御行方を尋ね御出でな

り」

と言上す。案内に連れて入り来る四郎兵衛忠信、御

座の間のこなたに出で、たへて久しき主君の顔、見

るも無念のあら涙、差俯いて詞なし。大将ご機嫌斜

めならず、

「汝に別れこゝかしこ、鎌倉殿の御詮議強く、身の

置きどころなかりしに、東光坊の弟子河連法眼にか

くまはれ、心ならざる春を迎へ、しばらくの命をつ

ぐ、わが姓名を譲りしその方、命全くあることわが

運のまだ尽きざるところ、ホ、才頼もしし悦ばし、

そのみぎり預けたる静はいかゞなりしぞ」

と、御尋ねありければ、忠信いぶかしげに承り

「コハ存じがけなき御仰せ。八島の平家一時に亡び、

天下一統の勝鬨かちどきをあげ給う。折から告げ来る母が病

気、聞し召し及ばれ、御暇給はつて本国出羽へ帰り

しは去年三月。ほどなく別れし母が中陰、忌中に合

戦の疵口おこづき、破傷風という病となり、すでに

命も危きなかば、ご兄弟の御仲さけ、堀川の御所没

落と承はる口惜しさ、胸を煎るほど重る病氣、無念

さ余つて腹切らんと存せしかど、せめては主君の御

顔、いま一度拝し奉らんと、念願叶いて本復とげ、初

立の長旅忍びの道中つゝがなく、この館に御入りと

承はり、たゞいま参つた忠信に、姓名を給はりし、イヤ静御前を預けしなんど、御錠の趣きかつもつて身に覚え候はず」

と、言はせもあへず、氣ばやの大将

「ヤアとぼけな忠信。堀川の館を立退きし時、折よく汝国より帰り、静が難儀を救いしゆえ、わが着長を汝に与へ、九郎義経という姓名を譲り、静を預け別れしその方。世になきわれを見限つて、静を鎌倉へ渡せしな。義経がありか捜しに来たか。たゞいま国より帰りしとは、まぎ／＼しき偽表裏、漂泊してもうつけぬ義経、斯らんとは推参なり。不忠二心の人外め、アレ引くゝつて面縛させよ、亀井、駿河」と腹立ちの、声に駈けくる二人の勇士、裾ばせ折つて忠信が、弓手馬手に反打かけ

「委細あれにてみな聞いた、サア腕廻せ四郎兵衛」

「静御前の御行方、明白に白状せよ。たゞし踏み付け繩かけうか」

「拷問して言はせうか」

「サア、どうぢや」

『どうぢや』とせりかけられてせん刀、差添ともに投げ出だし

「兩人待つた籠忽すな」

「ヤア待てとはたゞし言訳あるか、サア聞こう」

「サアなんと」

『なんと／＼』に難儀の最中、

「静御前の御供申し、四郎兵衛忠信殿御出なり」

と、奏者が声に、人々仰天

「ナニ忠信がまた来たとは、合点行かず」

と聞きもあへず、以前の忠信立ち上がり

「わが名を騙るはなんでも曲者、引くゝつて大将

への面晴せん」

と駈け行くを

「ヤアならぬく、詮議の済むまで動かさぬ」

と亀井が向うを支へたり

「ヤアさなせそ六郎、忠信これにあるうえに、また

忠信が静を同道、なににもせよ仔細ぞあらん、片時

もはやくこれへ通せ」

『アッ』と亀井は次の間へ、わが身あやぶむ忠信は、

黙してようすを窺へば。

別れほどへし、君が顔見たさ逢いたさとつかはと、

河連が奥の亭、歩み来る間もとけしなく

「ノウわが君か懐かしや」

と、人目いとはず縫りつき、恋しゆかしの溜々を、涙

の色に知らせけり

「ホ、ウ女心に歎くは尤も。別れし時言い聞かせし

ごとく、人の情に預かる義経。輪廻きたなき振舞な

らねば、つれなくはもてなしたり。忠信を同道とや、

いづくにあり」

と尋ね給へば

「たつた今次の間まで連立つて参りしが、こゝへは

まだか」

と見廻しく

「ソレくくく、ても早うこゝへ来てじや。一緒に

お目にかかるものを、ちつとの間に先へ抜けがけ、

まだ軍場かと思つてか。まんがちな人ではある」

と、恨み口なる、詞に不審、一倍晴れぬ四郎忠信

「わが君もそのごとく覚えなき御尋ね、拙者めは今

の先、出羽の国より戻りがけ、去年お暇申してから、

お目にかゝるはたゞいま初めて」

「エ、あの人のおぢやらくとてんがうなことばっか

り」

「ア、イヤてんがうでなし、大真実」

「アレまだ真顔でだますのか」

と、なに気も媚く詞のうち、立ち戻る亀井六郎

「静様同道の忠信、引つ立て来たらんと存せしとこ

ろ、次の間にもありあはさず、玄関長屋所々方々尋

ねても相知れず候」

と申すに、心迷わせ給ひ

「コレ静、こゝに居るはその方を預けたる忠信なら

ず。たゞいま国より帰りしと物語りするうち、忠信

静を同道との案内、二人あるうちにも見えざるは不

審者。面体似たる贗者ならずや。静心は付かざるか」

と仰せのうちに、忠信をつれづれと打ち眺め

「ハアどうやらそうおっしやれば、小袖も形も違う

である。お待ち遊ばせや。それかこれか、オ、そうじ

や、思い当ることがある。君が形見と別れし時給は

りし初音の鼓、御覽遊ばせ、このように肌身も離さ

ず手にふれて、忠信の介抱受け、八幡山崎小倉の里、

ところどころに身を忍びいたりしに、折々の留守の

うち、君恋しさのこの鼓、打って慰むたびたびに、忠

信帰らぬこともなくその音を感じに堪ゆること、ほん

に酒の過ぎた人同然。打ちやめばきよるりつと、な

に気ない顔付は、よく／＼鼓が好きそうなど、初手

は思い二度三度、四度めにはデモ変ったこと、また

五度めは不思議立ち、六度めには怖げ立ち、それよ

りは打たざりしが、君はこゝにと聞きつけて、心せ

く道忠信にはぐれた時、鼓のことを思い出し、打て

ば不思議や、目の前に、来るともなく見えたるは女

心の迷い目かと、思うて連れ立ち来たりしに、また

この仕儀はどうぞいの」

と、申し上ぐれば、義経公

「ム、鼓を打てば帰り来るとは、それぞ良き詮議の近道。静、そちに言い付ける、その鼓をもつて同道した忠信を詮議せよ。あやしいことあらばこの刀で」と投げ出だし

「わが手で打たれぬ鼓の妙音、それを肴に一献くまん、はやはや鼓打て〜」

と言ひ捨て奥に入り給へば、亀井、駿河も忠信に引つ添い

てこそ入りにけれ。園原や、帚木ならでありと見し、人の身の上いぶかしく、窺ひ出づる足音も、静は君の仰せを受け、手に取り上げて引き結ぶ、辛気深紅を緋い交ぜの、調べ結んで胴掛けて手の内締めて肩に上げ、手品もゆらに打ち鳴らす、声清々と澄み渡り、心耳を澄ます妙音は、世に類なき初音の鼓。かの

洛陽に聞こへたる会稽城門越の鼓、かくやと思ふ春

風に、誘はれ来たる佐藤忠信、静が前に両手を着き、音に聞き取れしその風情。すはやと見れど打ち止まず、猶も様子を調べの音色、聞き入り聞き入る余念の体。怪しき者とは見て取る静、折よしと鼓を止め、

「遅かつた忠信殿、わが君様のお待ち兼ね、サアサア奥へ」

と何気なき、詞に「ハツ」

とは言ひながら、座を立ち遅れて差し俯むく、油断を見済まし切り付くるを、ひらりと飛び退き飛びしさり、

「コハなんとなさるゝぞ」と咎められて機転の笑ひ、

「ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、オ、あの人の気疎い顔。久

しぶりの静が舞、見よふと御意遊ばす故、八島の軍物語を、舞の稽古」

と鼓を早め、かくて源平入り乱れ、船は陸路へ陸は磯へ、漕ぎ寄せ打ち出で打ち鳴らす。鼓にまたも聞き入つて余念たはひもなきところを、

「忠信やらぬ」

と切りかくる、太刀筋かはしてかいくぐるを、付け入る柄元しつかと取り、

「なに科あつて騙し討ちに、斬らるゝ覚へかつてなし」

と、刀たぐつて投げ捨つれば、

「贗忠信のサア白状、仰せを受けた静が詮議、言はずばかうして言はする」

と、鼓追取りはた／＼、女のか弱き腕先に、打ち立てられて、

「ハア、ハツ」

と、謝り入つたる忠信に、鼓打ち付け、

「サア白状、サア／＼／＼／＼」

と詰め寄せられ、一句一答詞なくたゞひれ伏してゐたりしが。漸々に頭をもたげ、初音の鼓手に取り上げ、さもうや／＼しく押し戴き／＼、静の前に直し置き、しづ／＼立つて広庭へ、下りる姿もしほ／＼と、みすぼらしげに手をつかへ。

「今日が日まで隠しおゝせ、人に知らせぬ身の上なれども、今日国より帰つたる誠の忠信に御不審かゝり、難儀となる故よんどころなく、身の上を申し上ぐる始りは、それなる初音の鼓。桓武天皇の御宇、内裏に雨乞ひありし時、この大和国に千年功ふる雌狐雄狐。二足の狐を狩り出だし、その狐の生皮を以て拵へたるその鼓。雨の神を諫めの神楽、日に向かふ

てこれを打てば、鼓はもとより波の音。狐は陰の獣故、水を発して降る雨に、民百姓は悦びの声を初めて上げしより、初音の鼓と名付け給ふ。その鼓は私が親、私めはその鼓の子でござります」

と、語るに、ぞつと怖げ立ち、騒ぐ心を押し鎮め、

「ム、そなたの親はこの鼓、鼓の子ちやと言やるからは、さてはそなたは狐ぢやの」

「ハツア、成程、雨の祈りに二親の狐を取られ、殺されたその時は、親子の差別も悲しい事も、弁へなきまだ子狐。藻を被く程年も長け鳥居の数も重なれど、一日親をも養はず、産みの恩を送らねば、豚狼にも劣りし故、六万四千の狐の下座に着き、たゞ野狐とさげしまれ、官上りの願も叶はず、親に不孝な子があれば、畜生よ野良狐と人間では仰れども。鳩の子は親鳥より枝を下がつて礼儀を述べ、鳥は親の養ひ

を育み返すも皆孝行。鳥でさへその通り、まして人の詞に通じ人の情も知る狐、なんぼ愚痴無智の畜生でも、孝行といふ事を知らいでなんと致しませふ。

とは言ふものゝ親はなし、まだも頼みはソレその鼓、千年功経る威徳には、皮に魂留まつて性根入れたは即ち親。付き添ふて守護するはまだこの上の孝行と思へども、浅ましや禁中に留め置き給へば、八百万神宿直の御番、恐れあれば寄り付かれず。頼みの綱も切れ果てしは、前世に誰を罪せしぞ。人のために怨する者、狐と生れ来るといふ因果の経文恨めしく、日に三度夜に三度、五臓を絞る血の涙、火焰と見ゆる狐火は胸を焦する炎ぞや。か程業因探き身も、天道様の御恵みで、不思議にも初音の鼓、義経公の御手に入り、内裏を出づれば恐れもなし。ハア、嬉しや悦ばしやと、その日より付き添ふは義経公のお蔭。

稻荷の森にて忠信があり会はさばとの御悔み、せめ

て御恩を送らんと、その忠信になり変り、静様の御

難儀を救ひましたご褒美とあつて、勿体なや畜生に、

清和天皇の後胤源九郎義経といふ御姓名を給はりし

は、そら恐ろしき身の冥加。これといふもわが親に

孝行が尽くしたい、親大事、親大事と思ひ込んだ心

が届き、大将の御名を下されしは人間の果を請けた

も同然、いよ／＼親が猶大切、片時も離れず付き添

ふ鼓。静様はまたわが君を、恋ひ慕ふ調べの音、変は

らぬ音色と聞こゆれども、この耳へは二親が、物言

ふ声と聞こゆる故、呼び返されて幾度か、戻つた事

もござりました。只今の鼓の音は、私故に忠信殿、君

のご不審蒙つて、『暫くも忠臣を苦しますは汝が科、

早や／＼帰れ』と父母が、教への詞に力なく、元の古

巢へ帰ります。今までは大将の御目を掠めし段、

お情には静様、お詫びなされて下さりませ」

と、縁の下より伸び上り、わが親鼓に打ち向ひ、交は

す詞の尻声も、涙ながらの暇乞ひ、人間よりは睦ま

じく。

「親父様母様、お詞を背きませず、私はもふお暇申

します。とは言ひながら、お名残り惜しかるまい

か／＼、二親に別れた折は何にも知らず、一日々々

経つにつけ、暫くもお傍にゐたい、産みの恩が送り

たいと、思ひ暮らし泣き明し、焦れた月日は四百年。

雨乞い故に殺されしと、思へば照る日がエ、恨めし

く、曇らぬ雨はわが涙、願ひ叶ふが嬉しさに、年月馴

れし妻狐。中に設けしわが子狐、不憫さ余つて幾度

か、引かるゝ心を胴慾に、荒野に捨てゝ出でながら、

ア、飢へはせぬか、凍へはせぬか、もし獵人に取ら

れはせぬか、わが親を慕ふ程、わが子も丁度この様

に、われを慕はふかと、案じ過しがせらるゝは、切つても切れぬ輪廻の絆、愛着の鎖に繋ぎ止められて、

肉も骨身も砕くる程、悲しい妻子を振り捨てゝ、去年の春から付き添ふて、丸一年たつやたゞず。『去ね』とあるとてなんとマア、『アツ』と申して去なれませふ、『アツ』と申して去なれませふかい／＼の。お詞背かば不孝となり、尽くした心も水の泡、切なさが余つて、帰るこの身はなんたる業。まだせめてもの思ひ出に、大将の給はつたる源九郎をわが名にして、末世末代呼ばるゝとも、この悲しさはなんとせん。

心を推量し給へ」

と、泣いつ口説いつ身もだへし、どうぞ伏して泣き叫ぶは、大和国の源九郎狐と言ひ伝へしも哀れなり。

静はさすが女氣の、かれが誠に目もうるみ、一間の方に打ち向ひ、

「わが君、それにましますか」

と、申す内より障子を開き、

「オ、委しく聞き届けし。さては人にてなかりしな。今までは義経も狐とは知らざりし。不憫の心」

とありければ、頭をうなだれ礼をなし、御大将を伏し拝み／＼、座を立ちは立ちながら、鼓の方を懐かしげに、見返り／＼行くとなく、消ゆるともなき春霞、人目朧に見へざれば、大将哀れと思し召し、

「アレ呼び返せ鼓打て、音につれ又も帰り来ん、鼓、

鼓」

とありけるにぞ。静は又も取り上げて、打てば不思議や音は出でず、

「これは／＼」

と取り直し、打てども／＼『コハいかに』、ちいともぼうとも音せぬは、

「ハア、さては魂残すこの鼓、親子の別れを悲しんで音を止めたよな。人ならぬ身もそれ程に、子故に物思ふか」

と、打ち萎るれば義経公、

「オ、我とても生類の恩愛の節義身にせまる。一日の孝もなき父義朝を長田に討たれ、日蔭鞍馬ひじとなりに成長、せめては兄の頼朝にと、身を西海の浮き沈み、忠勤仇なる御憎しみ、親とも思ふ兄親に見捨てられし義経が、名を譲つたる源九郎は前世の業、われも業。そもいつの世の宿酬にて、かゝる業因なりけるぞ」

と、身につまさるゝ御涙に、静は『わつ』と泣き出だせば、目にこそ見えね庭の面、わが身の上と大将の、御身の上を一口には勿体涙に源九郎、保ち兼ねたる大声に、『クワイ』と叫べばわれとわが、姿を包む春霞、晴れて形を現はせり。義経御座を立ち給ひ、手づ

から鼓取り上げて、

「ヤイ源九郎、静を預かり長々の介抱詞には述べ難し。禁裏より給はり大切の物なれども、これを汝に得さする」

と、差し出し給へば、

「ナニ、その鼓を下されんとや。ハア／＼／＼ありがたや忝なや。焦れ慕ふた親鼓、御辞退申さず頂戴せん。重々深き御恩の御礼、今より君の影身に添ひ、御身の危きその時は一方を防ぎ奉らん。返へす／＼も嬉しやな。オ、それよそれ、身の上に取り紛れ申す事怠つたり。一山の悪僧ばら、今宵この館を夜討ちにせんと企てたり。押し寄せさするまでもなし、わが天変の通力にて、衆徒を残らず謀つて、この館へ引き入れ／＼、真向立割車切、また一時にかゝつし時、蜘蛛手かぐ縄十文字、あるひは右袈裟左袈裟、

上を払へば沈んで受け、裾を払はばひらりと飛び、
軽捷秘術は得たりや得たり、御手に入れて亡ぼすべ
し。必ずぬからせ給ふな」

と、鼓を取つて礼をなし、飛ぶが如くに行末の、跡を
くらし